ISSN 0915—6925

大学アーカイヴズ

関東地区大学史連絡協議会会報

1990. 11. 2 No.3

Association of College and University Archives of Kanto Region

1990 年 3 月 14 日（水）研究部会

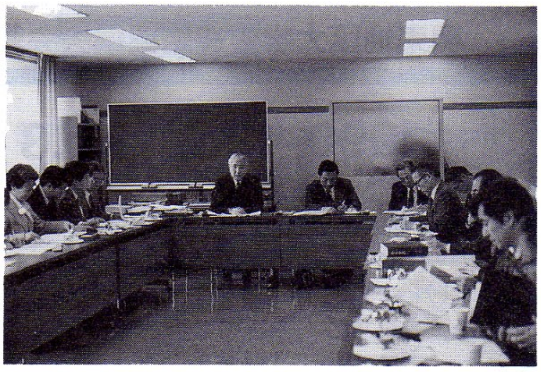
部会報告－「地域社会と大学史」（神奈川大学資料編纂室澤木武美）「文書資料の歴史的・文化的価値」（神奈川大学経済学部教授丹羽邦男）－を聞いて

上智大学史料室　小林愛子

第9回大学史連絡協議会研究部会は神奈川大学横浜キャンパス17号館に於いて開催された。報告は神奈川大学資料編纂室澤木武美氏による「地域社会と大学史」、同大学経済学部教授丹羽邦男氏による「文書資料の歴史的・文化的価値」の2題、参加者は20校・31名であった。学年末の忙繁期にもかかわらずの盛況で大変悦ばしいことではあったが、今回も相変わらず事務局への連絡無しの出席者があり、席や資料が足りなくなるなど会場校に迷惑をおかけした。大学史編纂および大学史資料の収集・整理に直接携さわる人々の積極的な勉強会として発足した協議会であるからには会の構成員として、省資源および会場校・事務局への最小限の礼儀として出欠席の連絡などの協力は当然のことではなかろうか。本来の研究部会報告から横道にそれてしまったが、準備期から現在の繁栄まで会の成長を眺めてきた者として敢えてここに一言申し上げたい。

「地域社会と大学史」の報告で澤木氏は各種史料編纂のヴェテランらしく、戦災や学園紛争の結果による少量の資料を駆使しての神奈川大学資料編纂および資料収集の現状をわかり易く話して下さった。たとえ大学独自の資料がなんらかの事由で散逸・消滅してしまったとしても、地域社会に残っている資料を使用することによりかえってその地域の一員としての大学を客観的に見ることができ、さらに日本の歴史における「大学の存在」を浮上がらせることが可能になる。勤務する大学が東京という大都会の真中に位置しているせいか、かえって視野が狭くなり大学資料にのみ集中して地域の歴史にまでは気が回らず、つい地域資料収集をおろそかにしてしまう私は大いに啓発されたことであった。

過去の古い文書だけが資料ではなく、現在作成中の文書にも目をつけておいて、それを将来確実に資料編纂室が入手できるようにするため、日頃から各部署の人々との関係を密にしているという澤木氏の努力も見逃せない。このことが大切なことは分っていてもなかなか実行し難いことは資料収集の担当者誰しも経験していることである。報告の場では直接触れられなかったが、配布資料の澤木氏の論文「戦後教育改革と神奈川大学」にある、新制大学昇格の際の神奈川大学の教職員・学生が一丸となってはらった教学・財政両面の努力（「教育刷新に関する所見」のまとめ、復興寄付金納入のための学生アルバイト等）は素晴らしい。これにより、戦後急速に進められた教育制度改革に大学独自の対応が可能であったという。これらの記事を掲載している「神奈川大学新聞」のレベルは現在発行さ



1990.3.14研究部会（神奈川大学）

れている平均的な大学新聞に比して非常に高い、これも時代であろうか。このような史実こそ「大学案内」に掲載し、毎年の創立記念式典で思いを馳せるべき事柄であろう。大学の揺藍期より現在に至るまで海外のカトリック信者の浄財に頼りきっている本学の財政事情を思って恥入るばかりである。

丹羽氏による報告のうち「公文書館の原点——村落での文書保存—」は近世史オンチの私でも大変楽しく伺うことができ、あらためて日本人の祖先の知恵に感激したことであった。世界に類をみない程多くの「庶民史料」という人類の遺産を継承した国民として誇らしく思うと同時に、「公文書館法」の制定に先立つこと数百年前すでに文書保存の原点が野沢村という小さな村落にさえも存在したという我国に、何が現代の文書館政策不毛の時代をもたらしているのだろうか、不思議である。

今回の報告で注目すべきは「文書に表現されない歴史の部分」への丹羽氏の着目ではないだろうか。長い間「大学史」は創立記念行事の一環として大学経営者に都合良く書かれた創立記念誌とされ、その反動としてこの十数年は史料による実証主義が抬頭してきて、「文書の裏付けのないものは歴史に非ず」とされているが、この傾向が極端になりかけている昨今の状況からこの意見は貴重であろう。徹底的に文書を集めても、そこには出てこない歴史がある、当然のこと・誰もが知っていることは文書に書かれないからである。難しいかもしれないが大学史業務の目標のひとつとして、この「文字にならない歴史の部分」を歴史の裏話としてではなく、正面からの歴史として受入れる努力があってもよいのではないかという丹羽氏の意見は正しいと思う。

丹羽氏はさらに史資料を取扱う専門職としてのアーキヴィストの資質についても触れられたがこまかなことは割愛する。しかし大学経営の生きた資料としての価値を有する現用文書の保存・廃棄に関してアーキヴィストの発言権が保障されるためにはその能力が大いに関わっているということは銘記すべきであろう。

関東地区大学史連絡協議会
1990年度総会議事録（抄）

日　時　1990年5月7日（月）14時～15時
場　所　私学会館 5階会議室（穂高）
出席校　26会員校（42名）
　　委任状5会員校（規約11条5項）
開会の挨拶　中央大学（会長校）林 勇夫氏
議長の選出　議長 法政大学 大野健一郎氏
　　副議長　立教大学 石田 弘氏
議　事 1，1989年度事業報告・同決算報告について（承認）
　　2，1990年度事業計画案・同予算案について（承認）
　　※参考 事業計画（抄）
　　(1)常任委員会開催 年8回
　　(2)研究部会開催　年5回
　　(3)会報の発行　年2回
　　(4)関連諸機関との交流
　　3，役員の選出について（承認）
　　※参考　1990年度役員
　　会　長　校　中央大学
　　副 会 長 校　神奈川大学　東海大学
　　常任委員校　成蹊大学　日本大学
　　明治大学
　　会計委員校　専修大学　玉川大学
　　監査委員校　東京経済大学 日本女子大学
　　4，その他（決算・予算書の様式を整えたらどうかとの提案あり）
懇親会　15時～16時30分

常任委員会議事録（抄）

第11回　1990年1月17日（水）14～15時

場　所　国士舘大学柴田記念館3階会議室
出席校　神奈川大学　玉川大学　中央大学
東京経済大学　東洋大学
小林愛子（上智大学）
議　事　(1)来年度の事業計画について
(2)その他(会報購読希望者については実費頒布<送料別>とする)

第12回　1990年3月14日(水)13時30分～15時
場　所　神奈川大学横浜キャンパス
17号館 17-516会議室
出席校　神奈川大学　専修大学　玉川大学
中央大学　東海大学　東京経済大学
東洋大学　日本女子大学　法成大学
明治大学　小林愛子(上智大学)
議　事　(1)来年度の事業計画・総会について
(2)その他(勝山吉章氏<名古屋大学史編集室>の協議会入会を1990年4月1日付で承認する)

第13回　1990年4月13日(金)15時～17時
場　所　中央大学駿河台記念館470号室
出席校　神奈川大学　専修大学　玉川大学
中央大学　東海大学　東京経済大学
東洋大学　日本女子大学　法政大学
小林愛子(上智大学)
議　事　(1)来年度の事業計画・総会について
(2)その他(学校法人東北学院・大沢泉氏<八戸大学>の協議会入会を1990年4月1日付で承認する)

第14回　1990年6月13日(水)15時～17時
場　所　中央大学駿河台記念館470号室
出席校　神奈川大学　成蹊大学　専修大学
玉川大学　中央大学　東海大学
東京経済大学　日本女子大学
日本大学　明治大学
議　事　(1)1990年度の事業計画について(会報第3号の編集・研究部会の運営)
(2)その他

第15回　1990年7月4日(水)14時30分～15時30分
場　所　成蹊学園史料館
出席校　神奈川大学　成蹊大学　専修大学
玉川大学　中央大学　東海大学
東京経済大学　日本女子大学
日本大学　明治大学
議　事　(1)1990年度の事業計画について(継続)
(2)その他

研究部会記録(抄)

第８回　1990年1月17日(水)15～17時
場　所　国士舘大学柴田記念館 3階会議室
参加校　16大学1個人会員(21名)
※国士舘資料室見学会

三浦信行国士舘資料室運営委員会委員長(政経学部第2部学部長)の挨拶の後、吉田丈作氏(国士舘資料室)から同資料室の設立経緯と概要が紹介され、資料の収集方法・整理方法等に関する質疑応答があった。その後、同資料室の自由見学に移り、資料の展示方法・照明について各自質問・研修した。

第９回　1990年3月14日(水)15～17時
場　所　神奈川大学横浜キャンパス
17号館 17-516会議室
参加校　20大学1個人会員(31名)
報　告　澤木武美氏(神奈川大学資料編纂室)
「地域社会と大学史」
丹羽邦男氏(同大学経済学部教授)
「文書資料の歴史的・文化的価値」

第10回　1990年7月4日(水)15時30分～19時
場　所　成蹊学園史料館
参加校　19大学2個人会員(31名)
※成蹊学園史料館見学会

報告する成蹊学園史料室中島喜一郎氏

松本公宏成蹊学園史料室長の挨拶があり、つづいて中島喜一郎氏(成蹊学園史料室課長)から同史料館の設立経緯・概要・記念誌(年史)の発行状況他について報告があった。報告後、史料分類方法、教育課程との関連、学園紛争のとりあつかいなどをめぐって質疑応答があり、自由見学に移った。中村春二記念室・収蔵庫・史料展示室等を見学し、資料展示方法・保存設備等について研修した。

会員校紹介

日本大学大学史編纂室

日本大学は、明治22年10月4日、時の司法大臣山田顕義伯を中心に「日本法律学校」として創立され、平成元年10月、記念すべき100周年を迎えた。

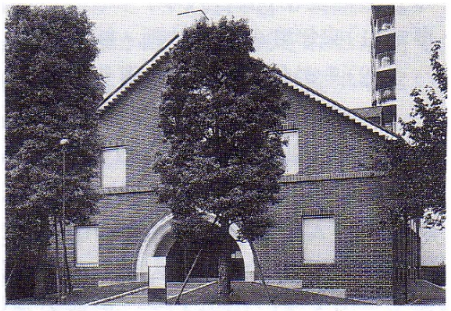
記念式典には60周年・70周年式典に引き続き、天皇・皇后両陛下のご臨席をいただく光栄に浴し、「人類社会に貢献する人々が、ますます送り出されることを切望します」とのお言葉をいただき、日本大学第2世紀に向けて、新たな第1歩を踏み出した。

年史の編纂は、「日本大学50年誌」（昭和15年）、「日本大学70年略史」（昭和34年）、「日本大学90年史」（昭和57年）の刊行のほか、各部科校（15学部・23付属高校等）においても、それぞれ10年・30年・50年・80年の節目に部局史が刊行されており、その数は枚挙にいとまがない。

大学史編纂室は、昭和44年11月に広報部調査資料課として発足、90年史編纂を契機に昭和53年10月に大学史編纂室として独立、90年史の編纂刊行、資料の収集整理、100年史編纂業務の推進など現在に至っている。今後の課題としては、新たな資料の発掘とともに、15学部に散逸している資料の集中管理、資料保存施設、展示室の設置など努力の必要を痛感している。

100年史の編纂は、昭和63年5月に100年史編纂委員会（委員19名）が発足し、専門部会（委員・幹事13名）を中心に「編纂の基本理念」「編纂仕様」「全5巻の構成案」等の決定をみて、いよいよ本格的な執筆活動が開始されようとしている。　以上

日本女子大学成瀬記念館



昭和59年10月、日本女子大学創立80周年記念事業の一環として設立、開館されました。

建物入口左の銘板には、「…その意図するところは、創立者の教学の理念と、本学の歴史を明らかにし、もって建学の精神の高揚と継承を図るとともに、ひいては、女子教育の研究の進展に寄与しようとするものであります。…」と本館建設の目的がうたわれています。この開館を機に、明治33年末に建てられた創立者の住宅は、分館として位置づけられました。また本年4月には、西生田キャンパスに人間社会学部が開学、「西生田展示室」も開設しました。

建設の趣旨に沿い、創立者成瀬仁蔵関係資料、本学園関係資料を収集中であり、同時に展示室では、学園を様々の角度から眺めた展示を実施し、この展示は、大学生必修の教養特別講義のレポート課題ともなっています。

展示によっては、先生に引率されて、附属幼稚園児、小学生も見学に来ます。また、学園の開かれた場として誰でも自由に観覧できますし（開館は火-金、9:30-4:30、土は12時まで）、学園関係の質問も受けています。

現在スタッフは、館長（学長）、主事（教授）、専任2人（司書、学芸員）、非常勤4人（内1人は学芸員）です。

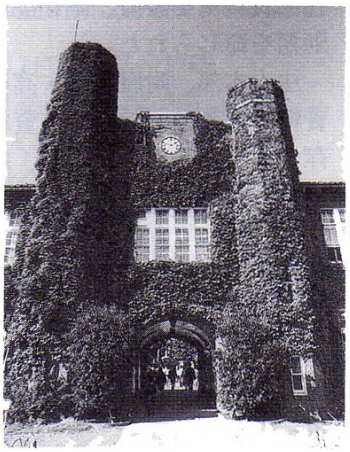
当館の運営委員会は、三学部長、図書館長、女子教育研究所主事、桜楓会（卒業生団体）理事長、館長、主事、常務理事で構成され、事業は委員会の了承のもとに実行しています。

開館6年目を迎え、当初からの刊行物『成瀬記念館』に加え、新規刊行物の企画、あるいは資料の整理、100年史に向けての企画等々、検討を要する課題を抱えています。

立教大学図書館大学史資料室

設置の経緯／立教学院は1974年創立百年を迎えて、百年史編纂委員会を組織し百年史を刊行した。編纂後、大学では1977年4月累加記録の整備、資料作成、歴史編纂等を目的とし総長室に大学資料室を設け、1986年には大学資料課と改称した。本資料室は、1988年4月同資料課を廃止して、図書館に新設されたものである。ちなみに、学院本部では、史資料の収集、保存等のため先の百年史編纂委員会を改組し、新に学院史資料室委員会を発足させた。この委員会により学院史資料室が運営され、「資料室たより」が発行されてきた(1989年解消)。

資料室の現状／スタッフは専任職員2名、嘱託1名である。恒常的な業務は、1)史(資)料の収集、整理、保管、2)目録等の整備、3)調査活動等である。1)はまさに今後の課題である。1923年の大震災以前の公文書類は学内にほとんどなく、戦前戦後を通して収集資料はとても少い。2)の業務は百年史編纂後、積極的に進められずここ1、2年は百年史の残務整理としても行われた。もうひとつ、創立者ウィリアムズの書簡集編纂も引継の業務である。



今後のこと／昨年1989年学院本部に125年史編纂準備委員会が設置され、本資料室はその事業に対して全面的バックアップ体制を取ることになった。年史編纂に関して学院全体のキーステイションになりつつある。その一環として今夏聞き取り調査が開始された。また、大学関係史(資)料の収集、整理、保存、活用に関する総合的、合理的体制の構築にむけて、積極的な役割を果すことを模索している。現在、資料室は公的刊行物をなに一つ持っていないが、学内外に対する調査研究活動の報告として目録、資料集、紀要などの編集を考えている。

資料室の建設とアンケート調査

日本工業大学資料室　　**松　本　義　男**

学校法人東工学園(平成2年4月1日付学校法人日本工業大学に変更)は、明治40年小石川に設立された東京工科学校に始まり、昭和6年財団法人東京工科学校、昭和10年財団法人東工学園と改称、校地も小石川から神田、現在地(目黒区駒場)へと移転、東京工業高等学校と東工学園中学校を設置した。

そして昭和42年学園創立60周年を記念して埼玉県宮代町に日本工業大学を設立。昭和62年に学園創立80周年、大学創立20周年を迎えて、はじめて年史「東工学園八十年史」と記念誌「日本工業大学今昔」写真集「日本工業大学20年の歩み」を刊行した。

同時に大学においては20周年を記念して学生を中心に様々なイベント(体育行事・文化行事・記念歌の募集、建築設計コンテスト等)が9月～10月2ヵ月にわたり開催され、当時私は学生課長として学生行事の責任者になり多忙な毎日を送っていた。

全ての行事が終り11月3日に盛大に発表会(入賞作品の発表・表彰式等)が行われた。祝杯に明け暮れ、一段落する間もなく忘年会シーズンに入った12月24日私は左手足に麻痺を生じ入院した。幸い軽度の脳梗塞(一過性)で1ヵ月入院、静養1ヵ月計2ヵ月の休暇の後職場に復帰することが出来たが、再発を心配した理事長と総務部長は、学生課にいて学生と酒ばかり飲んでいたのでは健康に悪いということで新しい部署の設置を検討した。偶々年史作成のため収集された資料が年史委員会解散後整理されないまま図書館の一室に山積みされていることに気付き、新しい部署として総

務部資料室を設置、昭和63年10月より資料室勤務を命じられた。

法人本部、附属中学・高校の方にも沢山の資料があるので、新しく資料室を建設して保存するということになり、総務部長から資料室(館)を持っている大学を調査するよう言われた。そして資料室を持っている大学を総務部長共々訪問し、本学の建設する資料室の参考にしようということになった。

そこで私は全国大学一覧より設置20年以上の私立大学269校を選び例のアンケートを依頼した。

アンケートの結果は先にご報告した通り(資料1参照)であるが、目的は資料室(館)を持っている大学がわかればよかったのである。

総務部長のはじめの構想は他大学に見られるような創立者や功績者の遺品、写真、展示公開、利用等を考えた資料室を作るつもりであったように思う。

ところがその調査結果を待たずに今度は平成元年春総務部長が病魔に冒され入院、一時小康を保ったが、今年6月再発、遂に平成2年7月1日逝去してしまった。

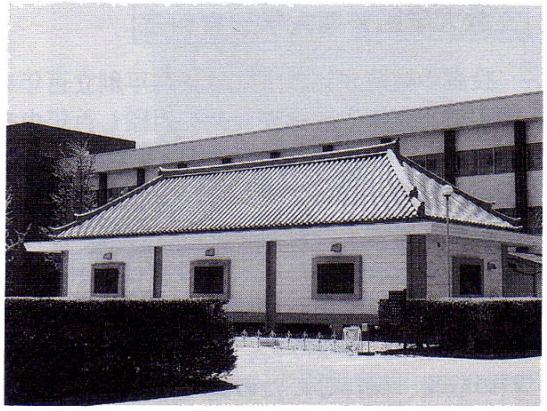
一方資料室は大学の意向を徴することなく法人サイドにより一方的に進行し、平成2年5月耐震・耐火、冷暖房完備しかも内部に事務室のない形だけは正倉院を模倣した瓦屋根の書類だけを保管する倉庫が竣工した。

完成した資料室は学園全体で永久に残さなければならない資料のみを保存し、展示・公開・利用等は一切考えなくてよいということである。…過去に震災・戦災を含む5回にわたり校舎が火災に逢い貴重な資料を焼失している学園の歴史から見てそういう資料室になったことは止むを得ないことだと思う。

そこで今度は資料の分類をどうするかが問題となって来た。 2回目として平成2年2月"資料の分類について"アンケートをお願いしたのはそのためである。

2回目のアンケートは当協議会加盟校の内女子大、医科大を除く資料室を持っていると思われる大学15校と1回目アンケートの結果資料室を持っていると思われた理工系大学4校の計19大学に依頼した。

その結果は回答のあった13大学中資料有7校、研究部会の際配布された資料2校の計9大学から資料が寄せられた。資料なしと回答された大学6校。回答なし7校であった。(資料2参照)



日本工業大学資料室

現在法人本部、附属中学・高校において資料室に持ち込む資料の整理をはじめているが一部づつ復写を残す作業をしているため遅れている。

一方大学内においては文書取扱規程により保存期限等の定めはあるが、具体的に永久保存のものは何かという資料名の明記がないために各課に呼びかけてもそれぞれの部署で大事に抱え込んでおり全々資料の提供がない状態である。

しかしこのままでは折角作った資料室が宝の持ちぐされになってしまうので、ぼつぼつ各課長に接渉し収集をはじめようとしているところであり、はっきり言って資料室の中には8月31日現在何も入っていないというのが実態である。

諸大学から寄せられた資料を参考に分類について検討を加え、本学に合ったものを作成し、受入れ準備を整え、根気よく説得、資料を収集するつもりである。

準備あれば憂いなし。

その内法人・附属中学・高校からどっさり資料が持ち込まれるであろう。

さあこれからが楽しみ?(苦しみ)である。

<資料1>

年史・資料等に関するアンケート結果報告
対象大学数:設置20年以上の私立大学269校

回答数:205校

(1)年史・記念誌等の刊行の有無について

有:166校 無:39校

発行年次ベスト10

1. 50年史 47校 2.100年史、20年史 28校

3. 60年史 26校 4.80年史 24校

5. 30年史 17校 6.90年史 16校

7. 40年史 15校 8.25年史、70年史 13校

9. 10年史 12校 10.15年史 11校 以下

35年史 4校、65、110年史 3校、42、45、75、85、125、350年史 各1校の順になっている。

同じ大学で10年毎に作成しているところがあり、又法人と大学の創立年度が異なるため、法人として年史を、大学として記念誌(○○年の歩みや写真集)を発行しているところもある。

(2)資料室又は資料館の有無について

有:75校 無:130校

○形態について

・建物の一室を資料室として使用 38校

・図書館内の一室を使用 24校

・資料館又は記念館として独立の建物と思われるもの 13校

○名称について

独立の建物と思われる資料館、記念館の外「資料室」という名称が最も多く、「史料室」「資料編纂室」「史編集所」「展示室」「資料センター」という名称もあった。

(3)資料の整理、保存の方法等について

○保存について

(2)記載の建物、室の中に木製又はスチール製書庫やファィリングキャビネット等に入れて現物保存が圧倒的に多く、重要書類については耐火金庫等に保存するというところが7校あった。

○機械化について

・目録、検索等について機械化、一部機械化 8校

・検討中 6校

○防災、保湿について

建物全体が冷暖房になっているので特に資料の保存についてのみ行なっているところは少ない。

○展示公開について

有:22校 記念日又は定期的実施:2校

○保存場所について

(2)記載の建物・室の外、関係部署へ分散保存というところもあった。

規定類について17校から貴重な資料をいただきました。上記の通りご報告申し上げます。ありがとうございました。

※問合せは日本工業大学総務部資料室

松本 0480 (34) 4111 (代) まで

<資料2>

資料の分類について調査結果 (平成2年3月10日現在)

依頼校(協議会加盟校)(名簿順)	回答	資料		備考
	有	有	無	
神奈川大学	○		○	電話連絡, カード分類
成蹊大学	○	○		旧資料, 検討中
専修大学	○		○	タイトル別に保管, まとまった時点で製本保存
中央大学	○	○		大学史料収集要領, 資料整理封筒(中性紙製)
津田塾大学	○		○	創立者津田梅子資料のみ臨時的分類
東京経済大学	○	○		写真分類表
東洋大学	○	○		資料分類, (一)(二)(三)冊子3冊
明治大学	○	○		3/14受領 歴史編纂資料室所蔵文書目録
立教大学	○		○	1大学設立の記録, 2聖公会関係資料, 3他大学寄贈の年史の3種類に大別, アルファベット順に整理
上智大学	○		○	受け入れ資料毎に整理, 目録作成, 移管システム検討中
大阪工大摂南大学	○	○		事務分掌に基づき作成, 細目分類表, 文章分類表案55.7.15作
武蔵工業大学	○	○		武蔵工業大学年史分類表
東京理科大学	○		○	

調査以外	
玉川大学	(資料目録・年表記載要領)——研究部会の際受領
国士舘大学	(資料分類体系)——研究部会の際受領
福岡大学	(年史編纂室・資料分類表)——アンケート調査の際受領

ミニ情報

※『国際基督教大学創立史』の刊行について

ICUの創設期のころの歴史をつづったC・W・アイグルハート博士の著書「International Christian University : An Adventure in Christian Education in Japan」(1964)の日本語版を刊行しました。これは、1999年に刊行予定の「国際基督教大学50年史」の基礎的資料として重要で、事業計画の一環として、このたび翻訳、刊行したのです。日本語のタイトルは、「国際基督教大学創立史—明日の大学へのヴィジョン(1945〜63年)」です。協議会の加盟校の各位には寄贈させていただきましたが、ご希望の方は、0422-33-3057 ICU 広報課磯貝にご連絡下さい。

(ICU 磯貝勝太郎)

※『八戸大学10年の歩み』の刊行

八戸大学商学部商学科が設立認可されたのは昭和56年1月16日であります。法人としてはすでに昭和34年3月学校法人光星学院として設立認可され、以来大学の他に、短期大学、専門学校、情報処理センター、高等学校、幼稚園からなる総合的学校法人として発展してきました。この度、創立10周年記念事業の一環として『八戸大学10年の歩み』の編纂が計画されました。9月中旬を刊行目標に作業が進められております。B5判、約65頁から成る小冊子ではありますが来るべく100年史に向けての基礎づくりと位置づけ、スタッフ一同日夜奮闘しております。

またそのほかに、八戸大学10年史展示会、記念講演会、スポーツ大会など、多彩な催事を計画しております。

なお、『記念誌』編纂にあたり、多くの大学から貴重な資料のご寄贈を頂き、この場を借りて感謝致します。　(八戸大学 大沢泉)

※『東北学院百年史—資料篇』刊行

昨年5月刊行『東北学院百年史』の資料篇で、本篇だけでも本院百年の歴史が見えてくるように、通史篇の編章構成にした。収録資料は370点、80余点は英文である。(A5菊版、千頁)

なお、本年6月より、史料室と広報係が合併して、広報室となり、両業務を行うことになりました。　(東北学院広報室 松浦平蔵)

※国立公文書館の案内

「国立公文書館年報」—公開資料の概要表あり「北の丸」—業務及び研究報告書、各年1回刊展示会は春・秋各1回1週間程度。この時は目録は無料で配布する。大学史に関係する所蔵史料では、何といっても文部省移管公文書だろう。学校史関係者は必ずあたられたい。

(国立公文書館 小川千代子)

※石川岩吉先生の没後30年展を開催

今の天皇を昭和20年までお育てした元傅育官で、戦後は本学にあって復興に献身され、今日の発展の基礎を築かれ、中興の祖と仰がれる石川岩吉先生(元理事長、学長)が逝って6月6日に30年を迎え、特別展を開いた。

(國學院大學校史資料室)

※「井上円了記念学術センター」開設

東洋大学では、創立者井上円了および東洋大学史の研究を進めるため、平成2年4月に「井上円了記念学術センター」を開設しました。『東洋大学百年史』の編集は、旧創立100年史編纂室から、当センターの事業として引き継がれています。

※日本大学100周年記念刊行物(既刊のもの)

『日本大学100年』—写真集—
『日本大学100年史年表』
『日本法律学校関係年表』(法学部刊)
『日本法律学校規則集』(法学部刊)

※中央大学大学史編纂課近刊予定

『中央大学史資料集』第7集(1990,12)
『中央大学史資料集』第8集(1991,1)
『中央大学史資料集』第9集(1991,3)
『中央大学百年史編集ニュース』第15号(1990,12)
『中央大学史紀要』第3号(1991,3)

ご案内

本協議会に関するお問い合わせ、入会申し込みなどにつきましては、下記事務局へご連絡下さい。

＜事務局＞中央大学広報部大学史編纂課
〒192-03東京都八王子市東中野742
☎0426-74-2132